
DESTINY外伝8 『夢の続きを』

把 多摩子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DESTINY外伝8『夢の続きを』

【Nコード】

N0583V

【作者名】

把 多摩子

【あらすじ】

人間の小国に立ち寄った、美貌の魔族。
畏怖の念を抱きながらも、国王とその姫に守られて精一杯生活する魔族のサーラに、人々は心を許し始めた。
この人間界で、暫し生きようと決意したのもほんの、12年。
優しき国王、無邪気な姫君、慕う国民。
サーラは、護りたかった、この国を。

強雨だった、耐えかねて城の門を叩くサーラ。

街は城と共に門で囲まれており、一時の避難場所としてサーラはそこを選んだ。宿へ泊めて貰おうと思ったのだ、中へ入れてもらい事情を説明するとこの場所には宿がないことを言われる。

あまりに来客が少ないので、空いている部屋がある家が旅人を受け入れる、というそんな場所だった。

だが、夜半で起きている住人がおらず、困り果てた衛兵が城へと連れて行った。流石に路頭に放り出すことが出来なかったのだ、人として当然か。兵士達の雑魚寝場へ案内された、そこでサーラは。

姫君・アンリと出遭った。

赤子の鳴き声、困り果てた女中が城を彷徨っており、なんとか寝付かせようと代わる代わる抱いては擦り抱いては擦り。擦れ違ったサーラは思わず声をかけると、優しく姫を抱きとめて微笑む。

すると不思議な事にアンリはびたり、と泣き止み替わりに笑顔を浮かべて愉しそうにはしゃいだ。

「誰かね、キミは？」

国王自らのお出ましに緊張する一同、サーラは恭しく頭を垂れると名を名乗った。

「サーラと申します、突然吹き荒れたこの大雨に森の大樹の下に非難しておりましたが何分身体が冷たく。快く受け入れて下さった門兵様に感謝しつつ、ここまで参りました」

「旅人であるか、それはご苦勞なこと。何もない城ではあるが、雨が上がるまで存分に滞在せよ」

「有難きお言葉にございます」

王の暖かい言葉に、皆が安堵したのだが一人だけサーラを快く思わない者が居た。王の傍らに控えていた兵隊長が訝しげにサーラを見、そして冷たい一言を浴びせる。

当然、剣先もサーラを捕らえていた。

「怪しいと思いますが。何故フードをとらないのでしょうか、この者は。無礼にも程があるかとっ」

言われ、サーラは迷うことなくそのフードを外し、深く頭を垂れる。

見た者が一斉に悲鳴を上げた、当然そこには人間にはない角が生えていたからだ。口々に魔族！ と罵られ、サーラはそれでも頭を垂れたまま。

王は低く呻き皆を止めると、歩み寄って手を差し伸べる。

「ふむ、魔族であったか。しかし、全く敵意はない様子。どうだろう、うちのアンリがそなたを気に入っているようであるし、暫し城に滞在してはくれまいか？」

魔族は豊富な知識を身につけていると聞く、アンリの実家庭教師にでも……」

「な、何を馬鹿なことを！？ 魔族ですぞ！？」

「承知しておるよ？ しかし彼がそう悪い魔族に思えないのでは」

「反対です！ 断固として反対です！ そもそも、近郊にそんな事実が知れ渡ったら、攻め落とされますよ。魔族と手を結び、墮落した暗黒の国家とっ」

「誰かが言わねば、近郊になど漏れぬ。誰が洩らすというのか」

「そ、それは」

「真っ直ぐな良い瞳をしておる、初めて魔族を見たが、好青年ではないか。どうだ、アンリの実家庭教師、なっではくれまいか」

正直、サーラも戸惑っていた。まさかそんなことを言われるとは思わなかった為、面くらい言葉を失う。人の良さそうな、いや、良すぎるくらいの世間知らずな王にしか見えない。

確かにサーラには敵意も悪意も何もなかった、が、少しは警戒しても良いのではないだろうか？

言葉を返せないサーラに、王は笑いながら我が子を抱き上げると、あやしなから小さく呟いた。

「赤子をあののように優しく抱きとめられる者に、悪い者はいないのだよ」

それだけだった。それだけで王はサーラの人柄を理解し、傍に置こうと決めたのだ。

「しかし、王!」

「魔族の彼から剣術も教われればよいだろう、結果的にこの城には良い事しか起こらないと思うのだが、兵隊長殿は違うのかね?」

「魔族ですぞ!」

「……この世の中、一番大事なのは隣人を如何に愛せるか、だ。種族が違うからといがみ合うのは間違っておる。人間同士とて争う時代、信用しさえすれば争いとて起こらないかも知れぬのにな。疑心が産む誤解は、もうたくさんじゃよ」

「ぐう」

「サーラとやら。そなた、何が得意かね?」

「は、はあ。何と唐突に言われましても、物書きや魔法等が得意かと。剣術も少々、あとは洗濯、掃除、裁縫等、でしょうか」

子供のように照れながら話すサーラ、優しく瞳を細めて見つめ、王は満足そうに笑うと「十分だ」と手を握る。得意分野など、初めて訊かれた。暖かい王の手に、サーラはほっと安堵の溜息を漏らした。

しかし、その手に、サーラは違和感を覚る。

見た目、何も出来ない弱々しい人が良すぎる王だ。だが、手は。

……紛れもなく剣士の手、それも相当な剣の使い。多少剣術も嗜んでいるサーラだ、剣によって出来る豆が硬く尋常ではない点に、弾かれたように顔を上げる。

固唾を飲んで見つめれば、瞳の奥に鋭い光が見えた。そう、王は世間知らずではない。お人よしではない。

サーラの全てを見抜いて、任せたのだろう。

その秘めたる力量に深々とサーラは頭を下げた、そして思ったのだ。この人間の王に仕えてみよう、と。どのみち、魔族と人間、時

間の流れは違う。サーラは放浪していた、特にやることなどなかった。

この夜、一人の魔族が人間の城に住まう事になった。流れるような紅蓮の髪、女のように細い線の男の魔族。金色の瞳は全てを見透かすようで美しいが、顔立ちも美女の様。ただ、頭部の二本の角が人間を怯えさせる。それさえなければ、誰もが羨む美貌の主だったろうに。

サーラを嫌悪し、逃げていく者も数名いたのだが、数日もすればその人柄に皆が心を許し、すっかり違和感なく城に溶け込んだ。それほどまでに、サーラの人柄は温厚だ。

最初は敬遠していたが、何より見ていて溜息が出る美しさ。時折困惑気味に微笑めば女達は黄色い歓声を上げる。初めての対応にサーラは苦笑するが、自分に興味を持ってくれたことはありがたかった。

逃げてしまった料理長の代わりに料理を作れば、大好評で弟子入りを志願する者が後をたたず。

繊細な指先で施す刺繍は奥様方に大人気、皆で習って名産品として売りに出した。

風景画も得意で子供達に教えつつ、また他国の歴史も十分学んでいたため小さな学校を開き。

野山に出れば薬草の見分け方、動物の獲り方を教え、すっかり人氣者である。

魔族というと、恐怖の象徴であったが上品な青年にしか見えなかったのも、人間たちはこぞってサーラにつききりとなっていた。美しい声ゆえに、歌をせがんだが流石にそれだけは音痴だったので、一度きりで終わる。吟遊詩人でもやれば逸りそうな容姿だけに、残念だ。

剣だけはそこそこ、というレベルであったが見抜いたのだから、とひっそりと国王から逆にサーラが教わった。

王の言った通り、サーラが来た事で城は活気で満ち溢れた。やが

てアンリも徐々に成長し、サーラと共に皆に愛される姫へと成長。

豊かな知識と絶大な信頼を誇る王と、人間にでも愛を持って接するサーラの二人に育まれて健やかに真っ直ぐに成長した。豊かな新緑色の柔らかな艶やかな髪に、温かみのある光を帯びた大きな瞳、軽く頬を桃色に染めて、熟れたさくらんぼの様な唇を持つ御伽噺の中のお姫様のような容姿だ。

愛くるしい顔立ちは、見る者全てを魅了してしまうと言っても過言ではない。実際姫に憧れる街娘達、恋焦がれる若者。

ただ、好奇心旺盛すぎるのが問題だ。

サーラから魔法を、剣術を、歴史を、法王学を学び、絵画に裁縫、舞踏まで。家庭教師として立派に役目を務めていたサーラは、この上ない充実感に包まれていた。

よく、城を出て野原で食事をしながら勉強するのが好きだったアンリ、当然厨房外でのサーラの料理の腕も否応なしに上がっていく。

「サーラ、今日は何を勉強する？」

アップルパイを満足そうに食べ終え、ごろごろと草の上を転がりながらアンリは笑う。苦笑いしてサーラが一冊の本を取り出した、見たことのなかった表紙に瞳を輝かせてアンリは転がって戻る。ドレスに草が、土が付着しようが問題ない。

物覚えが良いアンリは、一度言われた事は瞬時に覚えてしまうのだ。常に新しいものを知りたがる。

「勉強というか、そうですね。世界情勢でも」

「世界情勢？」

胸を弾ませてサーラの隣に座るとアンリは、サーラのアップルパイに手を伸ばす。顔を引き攣らせて見ていたサーラに舌を出して、悪戯っぽく笑うと「美味しいから、つつい」っと可愛らしく拗ねるのだ。

なので行儀が悪い、とも言えずにサーラは許してしまう。甘い、家庭教師である。

サーラが書き綴っていたその一冊、地図を広げてアンリに見せた。
「これが私達が住まう星……クレオの地図です」

「クレオ」

「ええ。クレオは4星。他に1星ネロ、2星ハンニバル、3星チュザーレなどがあります」

復唱し、懸命に覚えようとするアンリを見つめながら、クスリ、と穏やかに微笑むサーラ。勉強が始まるとアンリはもう夢中だ、全てを吸収しないと気がすまない。だから、教え甲斐がある。

「私達の城はここにありますが」

「ここ。ここが今、この場所なのね」

「ええ。世界は広い、城は広い場所のホンの片隅にあります」

地図を指しながら説明を始めた、魔族のほうが当然人間よりも博識だ。長い年月生きているからでもあるし、移動とて人間より楽である。サーラの場合普段は羽など出していないが、背にはコウモリのような羽を本来は背負っていた。それで飛行が出来るので上から土地を観察し、こうして地図にまとめている。

この城へ来る前は、そうして過ごしていた。

「宇宙、という場所にクレオもネロも、綺麗な球体として浮かんでいます。宇宙へは行く事が出来ません。が、惑星間は移動が可能です」

「何故宇宙へはいけないの？」

「空気がありません。空気とは今この瞬間にもアンリも私も体内に取り入れているもの、宇宙にはこれがなく、下手に行くと呼吸が出来ずに行き耐えてしまうのですよ」

「ということは、呼吸が宇宙でも可能なら行けるのね」

「そうですね、そのような魔法が開発されれば可能でしょうね」

「へえー。面白いね、不思議」

「まあ、話は逸れますが、宇宙には唯一人、美しい女神が存在するそうです。彼女は宇宙でも生きていけるそうです。女神、というか宇宙の創造主様になるのでしょうかね。何分神話レベルの語り継がれ

ですから本当かどうかは知りませんが」

「女神？ 創造主？」

「ええ、宇宙を創ったとされる創造主は一人で宇宙に住んでいるそうですね」

「一人？ 寂しくないのかな」

「寂しいでしょうね」

アンリに受け答えるサーラだが、無論そんなことは信じていなかった。確かに古書物を読み漁ると、時折出てくるのだ『宇宙の創造主である美しい女神』が。

類稀なる美貌を持ち、見たものの全てを虜にする……人間であれ動物であれ、植物であれ。

マリーゴールド、と一冊の古文書には記載されていたが、それがその創造主の名前ではなく、居る場所を指すということも解った。しかし、想像上のものである。

確証はない。

アンリが異様に創造主に興味を示したので、後程調べてみよう、とサーラは思いつつ話を進める。

「……寂しかったんだと思うよ、その人」

「ええ、一人ですからね」

「……その人、あのね、その」

「？」

突如何故か、アンリは大粒の涙を流し始めた。慌てふためいて涙を拭くサーラだが、ひたすら、涙を零すのを止めない。

数分後、ようやく止まった涙、困惑気味にサーラはアンリを抱き締める。寂しい、という感情を想像したら、同調したのだろうか。感受性の強い子だ、一人きりと考えたら涙が出たのだろう。

必死に背中を擦るサーラの腕の中、アンリは小さく言葉を洩らした。

「お父様にはナイシヨね、サーラ。私、捜したい人がいるの」

不意に小声で耳元で囁いたアンリ、首を傾げてサーラは目を見る

為にアンリを抱き起こす。愉快そうに、けれども頬を赤く染めて。涙で濡れた瞳、以前から言いたかった事をこっそりとサーラにのみ、伝える。

「素敵な人なんだ、夢に出てくる王子様を探しに行くの」
「は？」

何やら突拍子もないことを言い出した、とサーラは頭を抱えたのだが、アンリは真面目だ。

「あのね、気がついたら私を呼んでる人がいたの。すごーく、かっこいい人なの。なんていうか、こう……きゃー！」

「え、あの、ちょっと？」

サーラが手を伸ばすが、それを跳ね除けてごろごろと転がるアンリ、こんな状態は初めて見た。啞然として転がってきゃーきゃー喚くアンリを見下ろす、こんなキャラだったろうか？

草を衣服に髪に、顔につけてアンリは笑う。無邪気すぎて止める気にもなれないのだが。不意に真面目な声を出した、思わずサーラが固唾を飲み込む。

風が急に止み、太陽の光がアンリを照らす。美しい緑の髪が、日差しの温かみを取り入れ、さらに幻想的な色合いに。

「どうやったら、その人を捜せる？ 待ってても会いに来てくれると思うのだけど、早く会いたいから自分で行こうと思って」

「お、お名前が解らないと」

「名前なんて知らない、でも、必ず彼はどこかに居るの」

「それからアンリ様は姫なので、簡単に外出できませんよ」

「だから、サーラに相談したのにー、どうにかならない？」

「やー」

真剣なアンリに、確かにどうにかこうにかしてあげたいのだが、しどろもどろにしか答えられなかった。何故そうもその人に会いたいというのか、サーラには全く解らなかった。

夢で何度も見るから、と、一言で言ってしまうえば幼い姫の幻想だ。本当に実在する人物なのかすら、怪しい。多感期特有の、妄想でし

かない気がする。

首を横に振り続けるサーラに、アンリは次第に泣きそうに顔を歪める、そうなるかとサーラは冷や汗をかくしかない。

「と、ともかく、では旅の許可でも貰いましょうか」

「わーい、そうしょっ。勿論サーラが来てくれるんだよね？　なら大丈夫だよ」

項垂れて仕方なくそう告げた、それでも言わないと大泣きされそうだったからだ。12歳になったアンリは、時折自分で解ってやっていないだろうか、とサーラが思うくらい有無を言わせぬ迫力で迫ってくる。聞き入れてしまう自分も自分なのだが。

どうも大きな緑の瞳で見つめ続けられると、頷かなければいけない、と。

つまり、サーラがここへ来てから12年が経過した、ということだ。人間達と魔族の過ぎる時間は全く違う、魔族が瞬きする瞬間に人間は歳を取る。

王とて寿命が近づいていた、アンリの夫を探す話も浮上している。そんな中で旅など許されるわけもなく。

しかし、言ってしまった手前、どうアンリに説明すべきかと頭を悩ませていたサーラは、夜半過ぎに不思議な物音を聞いた。廊下に出て不審に城下町を窓から覗く、ちらほらと灯りは見えるが特に異常はなさそうだ。

「サーラよ」

「国王陛下、どうされました」

と、言ったものの瞬時に悟った事は”一大事”。

当たってほしくはないが王もサーラと同じく、胸騒ぎに駆けつけたのではないかと。不審な物音を聞いたのはサーラだけではなかったのだ、兵士達を早急に集め、様子を窺う。

街の様子はなんら変わらない、しかし。

胸騒ぎがするサーラは久方ぶりに羽根を伸ばし、城の上空から周辺を見渡した。

前方は海だ、崖である。後方は。

「な！」

夥しい魔物の羽音、それが聞こえてきた。急降下し、王にそれを告げる。この城を狙ってなのかはまだ解らないが、上空を通過するだけでも脅威の数だ。

闇夜に浮かぶ紅蓮の瞳、飛行型の魔物だが何かまでは近づいてこないと解らない。

突然の事態に慌てふためくが、王の判断の元、万が一を備えて城下町の民を城へと緊急避難させた。こちらのほうが安全だろう。皆、怯えて家族で身体を寄せ合っている。毛布を配り、水と食料を配布した。

10ほどの生物が確認された、齒軋りして瞳を細めサーラが睨みを利かせる。

「鵜ですね、妙に数が多い」

単体で見たことはあったのだが団体ではサーラも初見だった、ということとは故意に呼ばれたものだろう。魔界イヴァンへ向かっているのなら良いのだが。鵜の生息地域は、確かに周辺にある。

息を殺し、通過するのを今か今かと待つのだが、それはこちらへとやってきた。城から懸命に気配を察知し、伝令が数分おきに王へと届く。

届くたびに、人間たちは恐れ戦いた。

「お前だろう！ お前が呼んだんだ！」

サーラに突如として兵隊長が掴みかかり、壁に殴りつけた。止める間もなく青褪めた様子でサーラに暴行を加える、その様子は心底怯えきっているようだが。

制して王が隊長を怒鳴りつけた、それどころではない、と。

「何故サーラが呼ぶ必要がある？ 今は力を合わせこの危機を抜けねば」

「鵜は合成獣とでもいうのでしょうか、手足が虎で顔が猿、尾が蛇という奇怪な魔物です。火に弱いので弓矢に火をつけ攻撃しましよ

う。先に私が先手を取ります、零れた鵞がいたら、宜しくお願い致します」

滲んだ血を拭いながらサーラは立ち上がった、久し振りに身体を動かす、些か不安だったがそうも言ってられない。

「しかし、何故この城を？ あれほどの数、何者かが操っているとしたか」

言うなりサーラは城から飛び出し、翼を広げ宙を舞いながら鵞へと突進した。腰の剣を引き抜く、それは囀で即座に火炎の呪文を放ちながら四方を囲った。

剣に注意をひきつけ、動きを封じるかのように鵞を炎の中に閉じ込めたのだ。動物は火に弱い、効果的で泣き喚きながら火の中でもたっている。

あとはゆつくりと剣で仕留めていくだけだ、それくらいならばサーラとて10体相手にでも出来そうだった。火炎の魔法を突破されない限り、楽勝である。

気を抜かないように、意識を集中させたまま剣を振るう。もともと剣士ではないので戦い難いが、それでこの城の民を護れるのであれば十分だった。

アンリは寝ぼけ眼で起きて来た、嫌に城内が煩いので女官達を張り倒し大雑把に状況を確認。部屋に引っ込むと直様服を着替え、弓矢を手にして出てくる。

「姫様、どうかおやすみをっ」

「何事ですか？ 私にも詳しく状況を教えてよ」

部屋に押し戻そうとする女官を押し分け、父である王の前に出たアンリ。すっかり戦う気味にいるアンリに苦笑いをしつつも、頭を撫でた。その準備をしてきた時点で、気配で何かが攻めてきていると解る様だ、流石としかいい様子がない。

勇ましい瞳、サーラをつけてよかった、と王は儚く微笑むと跪いてわが子に口付けを。

「魔物が攻めてきた。今サーラが一人で戦っておる」

「私も出ます、サーラに魔法も弓も習いました」

「まだダメだ、サーラならやり遂げよう。彼を信じ、待つのだ」

強引に頭を撫でると、集まってきた民に向かって吼えるように王は叫んだ。

「彼に感謝を！ 魔族でありながらこの国の為に懸命に戦う彼を見よ！ 種族が違えど分かり合える、彼ほどこの城を愛しているものはいないかもしれない。

未だに彼を疎む者も居たようだが、間違いだ。彼こそ、誠実なる魔族。今は祈ろう、彼が無事に戻る事を」

王の言葉に民は窓からサーラを見上げた、そして涙して祈る。確かに最初の頃魔族の彼を恐怖の対象とし、話しかけないように逃げていた。だが、今は違う。

その心を悔い、民は懸命にサーラの無事を願った。優しくった魔族、気さくな青年。戦いが苦手かもしれないが、果敢に一人で上空で戦う魔族。

王妃を抱きながら王も自身の宝剣に手をかけていた、数年前のあの日、サーラをアンリの家庭教師として傍に置こうと決めたのは。

「いつか来る、魔族からの侵略に耐え得るため」

世界が魔族によって侵略されている話は王とて聞いていた、そんなときに備えこちら側にも魔族を引き入れる必要があると王は常々思っていたのだ。人間と魔族とでは力量に違いがありすぎる、稀に得意な力を持つ人間も居るのだが百人に一人、居るか居ないかだ。

生憎この城にそんな人間が自分しかいないと解っていた王は、サーラを見て決めたのである。

彼の人柄、力量ならば、万が一にも耐え得ると。サーラを師として学んだ人間達もまた、耐え得る者になるのではないかと。

先を読み、戦略の一つとしていた王だったが、正攻法ではいかない相手もいるのだ。汚い輩がいるのだ。人間とは、そういうものだ。聞こえてきた悲鳴は人間だった、驚いて皆がそちらを見ると広間にゴブリンがなだれ込んできている。

「むう、こちらからも!？」

兵士達が押し返そうと懸命に前線で戦っていた、が数が多すぎる。王も前に得るべく人ごみを押し分けて懸命にゴブリンへと向かった、当然アンリも付き添う。窓から見ればサーラはあと一息で鷗を撃破出来そうだった、今は彼が頼りである。

民は涙を流し震えながら救世主である魔族を待つ、サーラとてその状況に先程気がついたが、鷗をこのままにしておいてはいけない。しかし、相手にしている暇はない。

唇を噛み締め火炎の魔法を強化した、檻のように残る二体を閉じ込めると直様急降下して城へと向かう。ゴブリン程度なら本来人間でもどうにかなる、しかし数の多さと何より指揮官が……魔族であった。

宙に踏ん反り返っている髭を生やした下卑た魔族、とてもサーラと同種族には思えない。

あれが、魔族。人間たちが怯えていた、魔族の象徴。

「は、話が違う!」

叫んだのは兵隊長だった、思わずそちらを振り返る皆。やはりかと鋭く叫ぶ王に口笛を吹いて魔族は豪快に笑う。

「王様、いけねえなあ。コイツが裏切ると解っていたのなら先に処分すべきだろう。あんたは甘いねえ」

「約束が違うだろう! 我らはあの魔族を追い出して欲しいと頼んだのだ、城を攻撃するなど!」

「魔族を信用してないんだろ、あんた? あんな忠実な魔族を信じずに、わしらみたいなのに依頼するなんざあ、タワケだなあ? うひゃあっはは! 折角依頼を受けたんだ、暇だし叩き潰してやるよ、この城」

啞然と会話聞いていた民、多少混乱していたが兵隊長の妬みがこの事件を生んだのだと皆知った。そう、魔族のサーラに懐いていく人間が気に入らなかったのだろう。手柄をとられるかのように、皆に技術を教えていくサーラが疎ましかったのだろう。

何より国王に気に入られていたサーラが、目障りだったのだろう。
「なんということを！」

アンリが近づいて隊長の頬を平手打ちした、涙を零してその腰の剣を抜くと率先してゴ布林へ向かう。その姿を見て豪快に笑う魔族、あまりに非力な小さな娘が威勢よくこちらへむかつてくるのだ。笑いが止まらない。

「勇ましい姫さんだなぁ？ その隊長さんより余程かっこいいぜ」
「うるさい！ 即刻ここから立ち去りなさい！」

ゴ布林を薙ぎ倒して突き進む様子を、下卑た笑みで見ていた魔族、ようやく地に降り立つと恭しく礼をする。

「名前は名乗ってやるよ、オジロン。魔王アレク様直々の副隊長だ、次期ドラゴンナイト部隊長になる」

「まあ、素敵な肩書きですねっ。でも、アナタみたいな卑怯なのが隊長だなんて、魔族には大した人がいないのねっ」

恐れもせずに前に立ちふさがるアンリ、そして吐いたその台詞にオジロンは沸点に達した。確かに言う通りなのだが、小娘に言われでは。そもそも、全くの出鱈目だった、何時までたってもうだつの上がないしがない魔族のオジロンである。自分の見栄を否定されては、苛立ちも頂点に上るというもの。

怒りで震えながら腰の剣を引き抜く、禍々しい光を放つそれに、それでもアンリは屈しなかった。

それがオジロンに更に苛立ちを覚えさせた、なんと生意気な小娘か。

「アンリの言う通りです、下がちなさい」

歓声が上がった、窓から深紅の髪を靡かせサーラがふわり、と登場する。怒気の籠もった低い声と鋭い瞳、ゴ布林はそれに縮こまる。重低音の、平素のサーラとは違う声質。怒気を含んでいて当然だ、降り立った魔族の麗しき英雄。所詮低俗なゴ布林など威圧感だけで逃げ惑う、弱気存在である。

その姿を見て、素っ頓狂な声を上げたのはオジロンだった。震え

る声、青褪める顔。明らかにサーラを知っている様子である。

「あ、あんた！？」 人間に加担している魔族って、あんたのことだったのか！？」

「おや。知っているのですか私を」

先程の威勢は何処へやら。突如震え始めたオジロンに鼻で笑うと、サーラはアンリへと歩み寄る。そっと剣を下ろさせ、耳元で「こいつは私が」と微笑。落着かせるように、髪を撫でる。

「サーラ・ドンナー！ アレク様の従姉妹ナスタチューム様の側近、”紅蓮の覇者”の異名の……あの！」

「ああ、そうも呼ばれていますね。忘れていました」

平然と近寄るサーラ、聞いていた者として、サーラが唯の魔族ではなかったことに気がついた。どうも相当位が高いらしい、そんな素振りを見せなかったのに。ゴブリンに睨みを利かせれば、統率されたように一目散に逃亡する。

明らかに分が悪いと感じたのだろう、ゴブリンに混じりオジロンは情けなく逃げようとした。が、追跡するサーラ。愛する国民の前で惨殺は避けたいが、生かしておいてもロクな事がなさそうだ。

「あなたみたいな魔族がいるから、善良な魔族が間違えられて迫害を受ける羽目になるのですよ」

容赦なく斬りかかる、喉の奥で叫びながら必死に交わすオジロン。最早勝ち目の見えた戦いに皆は歓喜の声を上げた、逃げ遅れたゴブリンを勇敢に人間たちは追い返す。

勝利した、サーラの御蔭で国は護られたのだ。

その頃隊長が兵に取り囲まれ、王の前に引きずり出された。情けなく項垂れている様子に、民も落胆だ。そして、嫉妬心が最も醜く恐ろしいものであると心に刻む。

それでもアンリと王は妙な胸騒ぎに周囲に気を張り詰めている、このまま終わって欲しいのだが、そうも行かない気がして。窓から見た月が妙に真っ赤でアンリは思わず胸を押さえた、瞬間、何かが弾け飛ぶ。

悲鳴が響き渡った、城に鵠が突っ込んできたのだ。振り返ったサーラの瞳に、真っ赤に燃え盛る二体の鵠の死骸と、そして隣に立つ女の姿。

「ビアンカさまあ」

オジロンが涙声で叫んだ、知り合いということはこちら側の敵である。舌打ちしてサーラはその女へと舞い戻ると上空から剣を振り下ろす、女の黒髪が揺れ、残忍な笑みが現れた。

「サーラ・ドンナーに会えるとは、また奇怪なこと。部下の失態許してね」

聞く耳持たず、サーラは打ち込む。オジロンとは全く違い、ビアンカの力量はサーラとほぼ互角のようだ、流石に額に汗が滲む。

そもそも先の鵠戦で体力を消耗しているのだ、上がる息は早かった。喉の奥でそんな様子のサーラを見ながら、ビアンカは阿鼻叫喚の人間達を見下ろし、目障りだとばかりに魔法を繰り返す。

真空の魔法、カマイタチが人間達を襲い血の飛沫を空中に浮かべた。愉快そうに狂喜の歓声を上げたビアンカに、サーラは憤怒する。渾身のサーラの一撃を軽く自身の巨大な斧で受け止め、弾き返すと同時に剣を打ち砕いた。

啞然とするサーラ、余程の合金のようだ二つに割れた剣では戦えない。

「サーラ、これを！」

額から流血しながら王がサーラに向かって何かを投げつける、それは王の宝剣だった。唇を噛み締めそれを受け取ると再度夢中で斬りかかる、しかし女性ながら異様なほどの腕力。相当の手腕だ、余裕の笑みで攻撃を繰り返してくるビアンカ。

サーラはアンリが気になっていた、始終打ち込みながら探していた。その隙を突かれたのだ、意識をビアンカに集中していれば勝てたかもしれないのだが。

王の投げた宝剣は”グラムドリング”炎を帯びた両手剣で代々伝わる、神器に匹敵しかねない代物だった。ビアンカの蹴りがサーラ

の腹部に減り込む、そして追撃で巨大な斧の攻撃。

辛うじて刃からは避けたが、横身で殴打されて地面へ落下した。

「サーラ！」

駆け寄ったアンリに物珍しそうにビアンカは近づく、恐怖の色も見せずに睨み返したことに、面白くなさそうに唾を吐き捨てる。

「奇妙な人間だねえ、恐怖に慄けばいいのに」

サーラを抱き締めながら、アンリは剣を構えた。後方ではビアンカの出現で戦意を取り戻したゴブリンが舞い戻り、民を殺し始めている。このビアンカを倒せばこの事態が急変するとはわかっていた、がアンリでは。

無理だ。

叫んで斬りかかって来たアンリを容易く避けて足で蹴飛ばす、倒れ込む前にアンリはばねをつかって立ち上がると、感嘆の声を洩らしたビアンカに再度斬りかかった。

サーラからの特訓の賜物である、歯を食いしばり懸命にアンリはビアンカに喰らいついた。負けてなるものか、と。

「へえ、反射神経は良いね、あんた」

ビアンカがオジロンよりも強い事は明白で、下手したらサーラよりも強いかもしれないのにアンリでは……敵う訳もなく。

真っ赤な月と、黒髪の残忍な魔族。

それを瞳に焼き付けて、アンリは崩れ落ちた、サーラと共に。

「まあ、人間の分際で。なかなか、面白かったよ？」

やがて、サーラが目を覚ましたとき、身体中を激痛が走った。だが、自分の上に覆いかぶさっている生暖かいものがアンリであると感じた時に、そんな痛みをもろともせず起き上がったのだ。

必死で庇ったのだろう、鮮血まみれのアンリは、もはや虫の息。

息があるだけでも、奇跡だった。

治癒の魔法が使えないサーラは、己を責めた。泣き喚いてアンリを抱き締めていた時、唇が微かに動く。寝かせて何を言っているの

か聞こうとした、涙がアンリの唇に零れ、湿らせた。

早朝、寒い空気の中で、息も絶え絶えにアンリは語る。

「前。サーラ、話してくれたよね。勇者様が存在するって。今、この世界には勇者様がまだいないみたいだね、いたら来てくれたものね。」

勇者になったらみんなを助けられる？　なら、私生まれ変わって勇者になるの。

だから待ってて、必ず幸せな世界を築きましょう。サーラは魔族だから、もっと長く生きられるでしょう？　待ってて、また一緒に色々お勉強を……」

勇者になれば、人を救える、世界を救える、何処へだって行ける。人間も魔族も、仲良く暮らせるに違いない、そういう世界を創る事が出来るに違いない。

涙を流しながらサーラは大きく頷いた、小さな身体で次のことを考えている少女に涙した。

「良いことしたら、あの人は私を誉めてくれる？　みんなの役に立てる？　嫌わない？」

その言葉はサーラには意味が解らなかったのだが、満足そうにアンリは頷いていた。穏やかな笑みを浮かべて、サーラの腕の中で見えない瞳を開いた。

滅び行く国で、次は勇者になりたい、と願った。勇者になるなら力が必要だ、誰にも負けない力が必要だ。

勇者に、なれば。勇者に、なりさえすれば。もう、何も。

「力を、解放するの」

瞳を閉じる、サーラの声が遠くに聞こえた。名前を呼ばれているのは判るが、もう、返事が出来ない。

まどろみの中、痛みもないそんな中でアンリは誰かを見た気がした。誰かに呼ばれた気がした。

『次は死んだらダメだよ、会えないから』

その声に思わず頷いて、アンリは悲しそうに微笑む。

「待ってて。勇者になるから、勇者になればきつとすべて上手いくから！ 私、勇者になるの」

誰かに、そう叫んだ。

「アンリ！ 起きるんだ、アンリ！ 君を、ナスタチューム様の元へ連れて行く、あの方なら君を救える！ 頼む、頼むから起きてくれ！」

サーラは懸命にアースを揺する、が、もはやアンリは戻らない。死屍累々、愛する国は滅亡した。何故、サーラだけが生きているのか。他に誰も、生きている者はいない。アンリを庇うように、国王と王妃が近くに倒れている。剣をサーラに預けた国王では、ビアンカに田打ち出来なかった。

自分を、責めるサーラ。自分が起こした、惨劇だった。この城に来なければ、あの兵隊長とて魔族を呼び寄せなかったろう。そこまですべて彼の精神は蝕まれていたのだ、自分の責任だとサーラは呪うしかない。

「アンリ、アンリッ！」

自分を慕っていた老婆の死体が、転がっている。刺繍が大好きでいつも、習いに来てくれていた貴婦人だ。隣はその孫、花をよく摘んではサーラの髪に挿してくれていた。向こうは、自分の弟子を志願していた若い料理人。いつかは都会でコックをするのだと夢を語ってくれた。

皆、サーラを護るように、すがるように集まっていた。

「ああ、ああーっ！」

アンリは、そんなサーラを慰めるようにいつまでも手を握ったまま。

……命を、絶たないで。絶望しないで、サーラ、貴方は皆を護ったの。だから、お礼で皆が護ったのよ。貴方は生きて、生きていて……
「無理だ！ 私、もう、何もっ」

紅蓮の覇者、サーラ・ドンナー。

彼の叫びは、周囲に響き渡る。何日も何日も、その場にサーラは佇んだ。泣き喚いた。

やがて、彼の親友が通りかり救出するまで何も口にせずに。叱咤され、殴打されてサーラは気付いた。それでも死ななかった自分を呪い、死体の皆をせめて弔わねばならないと。

「勇者を、待つんだ」

親友の言葉に、虚ろに頷くサーラ。国王から授かった宝剣を手に、アンの首飾りを自分の守りとし。絶望に打ちひしがれながらも、賭けに出たのだ。

アンを待つ、勇者を待つ。

(後書き)

本編 <http://ncode.syosetu.com/n1747u/> へと回帰します。

お読みくださり、有難う御座いました。

本編を読まれて、伏線に気付いていただければ、激しく歓喜に打ち震えます。

他の外伝も順次掲載予定です、もし、全て読み終えて下さり、作者の意図がわかっていただければ非常に光栄です（ぺこり）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0583v/>

DESTINY外伝8 『夢の続きを』

2011年7月21日03時41分発行